

進学希望者が多い普通科高校におけるキャリア教育の充実に向けて

－入学から文理選択までの進路指導－

総合支援課 高校 班
実務研修員 水野 昭善

1 はじめに

平成 11 年の中央教育審議会（以下「中教審」）の答申(注 1)でキャリア教育の必要性が提唱されて久しい。リクルート進学総研による「2014（平成 26）年高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」によると、86.8%の高等学校（以下「高校」）が「現在、キャリア教育に取り組んでいる」と回答しており、キャリア教育は浸透してきていると言える。しかし、高校普通科に限れば 85.3%、大学短大進学率が 95%以上の高校では 84.3%であり、総合学科(98.6%)や専門高校(91.9%)のそれと比較すると、大学進学率が高い高校(以下「進学校」)のキャリア教育に対する取組は遅れていると言える。このことは進学校のキャリア教育を扱った先行研究でも指摘されている。ほとんどの生徒が大学を経由して社会に出ることもあり、キャリア教育の充実に注力することより、大学進学、特に国公立大学進学を目的とする指導がされている高校も少なからずあると聞く。

昨年度まで学級担任を務めていた進学校でも、自分の進路を自分自身で決定することができない生徒が少なからずいた。例えば、1年生の秋に行われる文科系コースと理科系コースを選択する（以下「文理選択」）場面や、3年生での受験学部・学科選びをする場面であり、これらの生徒は、将来の見通しを持っていないことが多く、進路の決断を保護者や塾の講師などの他者に依存したり、「理系は就職に有利」などの漠然とした情報に左右される傾向がみられた。

前述のリクルートによるアンケートでは、進路指導の難しさについても質問されており、大学短大進学率 70%以上の高校で、89.1%の進路指導主事を中心とした教員が「非常に難しい」、「やや難しい」と回答している。その要因として「入試の多様化(72.2%)」、「教員が進路指導を行うための時間の不足(71.4%)」、「生徒の進路選択・決定力不足(62.5%)」が続いており、経験による実感と一致している。

意思決定能力に関しては、国立教育政策研究所（以下「国研」）がキャリア教育を通して育成すべき能力について、平成 14 年に提示した「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）－職業的（進路）発達にかかわる諸能力の育成の視点から－」の中の 4 領域 8 能力論に示されており、平成 23 年 1 月の中教審答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」で謳われた基礎的・汎用的能力の中の課題解決能力やキャリアプランニング能力に組み込まれている。また、前述のリクルートのアンケートで「今後注力していきたい教育」という質問に対する回答では、大学短大進学率が 70%以上の高校で「学ぶ意欲を高める教育(89.6%)」、「学力を向上させるための教育(70.4%)」に次いで「課題を発見して解決する力を身につける教育(60.2%)」、「多様な他者とコミュニケーションする力を身につける教育(59.8%)」、「自ら意思決定する力を身につける教育(56.4%)」となっており、学力に関する項目に次ぐ位置にある。

高校卒業後も人生の様々な場面で、自らの意思で判断していく場面が訪れる。さらに今後の社会は、人工知能（AI）の発達や技術革新の影響などにより、環境が激変し、職業の在り方が大きく変化することが予想されている。このような社会を生き抜いていくためには、様々な情報を取捨選択し、自らが置かれた状況を踏まえた上で、自らがよりよい人生を送るために何をどうすべきかを主体的に判断することが求められる。したがって、進学校においてもキャリア教育を充実させ、生徒に基礎的・汎用的能力を育むことが必要である。

2 主題設定の理由

平成 27 年度学校基本調査（注 2）によると、中学校を卒業した生徒の約 99%が高校へ進学し、そのうち約 73%が普通科高校に入学する。さらに普通科高校に進学した生徒の約 64%が大学等に進学する。これら生徒の多くは、高校で文理選択をする。文理選択は大学受験の際、大学の各学部・学科が課す受験科目を重点的に学習するという観点から設けられており、このコース決定は、進学する大学の学部・学科を左右することが多い。大学の学部・学科による専門性はその後の就職に密接に関わっていくことから、文理選択は生徒の将来に大きく影響を及ぼす選択となり得る。文理選択が行われる時期は、各高校で異なるが、平成 25 年の国研による「中学校・高等学校における理系進路選択に関する研究の最終報告書」によると、87.7%の高校が高校 2 年生から文系・理系コースに分かれると回答している（文理のコース分けがない高校、無回答の高校は除く）。高校 2 年生でコース別に分かれるためには高校 1 年生の途中で文理選択が行われなくてはならず、所属校においてもこのような教育課程が編成されている。

本来、自己決定能力は、小学校、中学校でのキャリア教育の上に立って、高校 3 年間のあらゆる教育活動の場で主体的に選択し、決定に伴う責任を果たすことで育んでいくものである。文理選択は、その重要な機会の 1 つとなる。また、上述した通りの重大な決断であるにも関わらず、入学から文理選択までの期間は短く、その準備にかかる取組が十分とは言えない現状がある。そこで、本研究は、文理選択に焦点を当て、進学校におけるキャリア教育の在り方を考えた上で、所属校の取組をもとにしながら、入学から文理選択までの有効な進路指導計画案を示したい。

3 研究の方法

- (1) 所属校の教育活動を見直し、文理選択までの活動における課題を把握する。
- (2) 所属校の生徒への文理選択におけるアンケートを実施し、生徒の現状やニーズを把握する。
- (3) 県内外の進学校における文理選択までの進路指導実践を調査し、入学から文理選択までの有効な進路指導計画案作成の参考にする。

4 研究の内容

(1) 所属校の文理選択までの活動における課題の把握

所属校は創立 120 年を超える県内有数の伝統校であり、全日制普通科と国際科が併設されている。毎年 100 名を超える者が国立難関 10 大学（北海道大学、東北大学、東京大学、東京工業大学、一橋大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、九州大学）及び医学部に入学している進学校である。

本年度の教育目標は、「学問と知性を愛する豊かなところ、良識に基づく自主独立を基盤として心身の調和的発達を図り、文化国家の形成者として社会の要請に応えるとともに、広く世界的視野に立って人類の発展に寄与できる人間を育成する」である。この目標を具現化する柱として、進路指導部では「高い志を育成し、三年間を見通した 1,200 通り（全校生徒数が約 1,200 名）の進路実現を図る」としている。本年度の取組目標には、「高い志の維持と進路選択能力の育成に努め、確かな学力を形成する丁寧な進路指導を行う」と学校経営計画書に明記している。

教育目標にもあるように、所属校には市内の学力上位の生徒が入学し、難関大学や医学部を経て世界で活躍する国家や地域のリーダー、地域医療に貢献できる人間を育成することが生徒や保護者、地域から期待されている。したがって、所属校で教育活動を構想する上で学習意欲や学力の向上は最優先で考えていく必要がある。

学習意欲の喚起は学力の向上の重要な鍵となる。現行の学習指導要領（注 3）には「個別指導やグループ指導、繰り返し指導、学習内容の習熟の程度に応じた指導など個に応じた指導の充実により分かる喜びを実感したり、観察・実験やレポートの作成、論述などの体験的な学習や知識・技能の活用を図る学習活動、職業や自己の将来に関する学習などを通し学ぶ意義を認識したりすることで学習意欲を高めることが求められる」とあり、キャリア教育の面からも学習意欲を高めていくことが求められている。また、キャリア教育と学習意欲の関係については、国研の「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書（平成 25 年）」内に見られ、キャリア教育計画の充実度が高い学校ほど学習意欲が向上するとの報告がある。

所属校では、進路指導部主催で進路研修会が年 5 回開催されている。そのうち、1 回は大学入試センター試験後の進路検討会であり、残りは所属校で進路指導を行っていく上での研修となっている。その際、研修の中心となる内容は、校内実力テストや校外模試、大学入試センター試験結果と大学合格の関連性についてであり、それら数多くの情報が掲載されている「進路のしおり」の活用の仕方や、生徒、保護者へのアドバイスの仕方となっている。

また、進路指導部では校内実力テストや難関大学の入試問題分析を踏まえた課外授業の充実に注力している。これらのことから、所属校での進路指導は、キャリア教育での視点より進学指導に力点を置いていると言える。

進路指導部が主導で行っている上記の取組も、前述した生徒や保護者、地域の期待を考えれば必要であることは言うまでもないが、国研によって示されたキャリア教育の充実と学習意欲が正の相関関係にあることを踏まえ、キャリア教育を充実させることで、

学習意欲を高め、基礎的・汎用的能力を育成することは、生徒が今後、先の見えない社会を生き抜くために必要な事柄である。また、教育目標に「～広く世界的視野に立って人類の発展に寄与できる人間を育成する」とあり、大学進学だけでなく、社会貢献を念頭に置いた指導の重要性を読み取ることができる。上記の事柄を考慮すれば、所属校でキャリア教育を充実させていく意義は大きい。

現行の学習指導要領（注3）では、「生徒が適切な各教科・科目や類型を選択し学校やホームルームでの生活によりよく適応するとともに、現在および将来の生き方を考え行動する態度や能力を育成することができるよう、ガイダンスの機能の充実を図ること」と示されている。そこで、この点に関する教育活動の中心を担う総合的な学習の時間（所属校では「蜻蛉タイム」）及びロングホームルーム（以下「LHR」）をキャリア教育の視点から見直した。各活動がキャリア教育における「基礎的・汎用的能力」の4つの能力（人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力）のうち、どの能力の育成を期待したものを図にまとめた（資料1）（平成28年LHR・蜻蛉タイム計画表より）。なお、各能力への位置づけは、文部科学省の基礎的・汎用的能力及び「静岡県教育振興基本計画「有徳の人」づくりアクションプラン」（注4）を参考にした。

【資料1】 蜻蛉タイム及びLHRの活動内容（基礎的・汎用的能力及び授業時間数を表示）

月	1年生 蜻蛉タイム・LHR	2年生 蜻蛉タイム・LHR	3年生 蜻蛉タイム・LHR
4月	①オリエンテーション(シ、キ) ②学祭オリエンテーション(ニ) ③HR役員決め(ニ、(シ)、(キ)) ④生徒地区会(ニ、(シ)) ⑤修学旅行準備(シ、(カ))	①初期指導(ニ、(シ)、(キ)) ②対面式(ニ) ③学祭準備(ニ、(シ)、(カ)、(キ)) ④HR役員決め(ニ、(シ)、(キ)) ⑤生徒地区会(ニ、(シ)) ⑥修学旅行準備(ニ、(シ)、(カ)、(キ))	②遠足準備(ニ、(シ)、(カ)) ①対面式(ニ) ②学祭準備(ニ、(シ)、(カ)、(キ)) ③HR役員決め(ニ、(シ)、(キ)) ④生徒地区会(ニ、(シ)) ⑤学祭準備(ニ、(シ)、(カ)、(キ))
5月	①X-LHR(ニ、(シ)、(カ)) ②特別講義(シ、(キ)) ③XR-CAP(適性検査)(シ、(キ))	①X-LHR(ニ、(シ)、(カ)) ②特別講義(シ、(キ)) ③XR-CAP(適性検査)(シ、(キ))	(遠足) ②学祭準備(ニ、(シ)、(カ)、(キ)) ③特別講義(シ、(キ)) ④進路指導(キ)
6月	①進路のしおり(シ、(キ)) ②執行委員長選挙(ニ) ③応援練習(ニ、(シ)) ④壮行会(ニ、(シ)) ⑤合唱練習・反省(ニ、(シ)、(カ)) ⑥小論文指導(カ)	①進路のしおり(シ、(キ)) ②執行委員長選挙(ニ) ③修学旅行準備(ニ、(シ)、(カ)、(キ)) ④壮行会(ニ、(シ)) ⑤合唱練習・反省(ニ、(シ)、(カ)) ⑥受験科目調べ(キ)	①進路のしおり(シ、(キ)) ②執行委員長選挙(ニ) ③進路講演会(カ、(キ)) ④クラス独自(ニ) ⑤合唱練習・反省(ニ、(シ)、(カ)) ⑥受験科目調べ(キ)
7月	①教科選択説明会(キ)	①教科選択説明会(キ)	①教科選択説明会(キ)
8月	①ブロック別集会(ニ、(シ)) ②2学期に向けて(シ)	①ブロック別集会(ニ、(シ)) ②2学期に向けて(シ)	①ブロック別集会(ニ、(シ)) ②2学期に向けて(シ)
9月	①先輩による課外授業(シ、(キ)) ②保育実習準備(ニ、(シ)、(キ)) ③小論文指導(カ) ④防災訓練(シ、(カ)) ⑤クラス独自(ニ)	①先輩による課外授業(シ、(キ)) ②修学旅行準備(ニ、(シ)、(カ)、(キ)) ③修学旅行準備(ニ、(シ)、(カ)、(キ)) ④防災訓練(シ、(カ)) ⑤修学旅行準備(ニ、(シ)、(カ)、(キ))	①センター出願説明(キ) ②センター100日前集会(キ) ③防災訓練(シ、(カ)) ④クラス独自(ニ)
10月 文理選択 20日前後	①進学講座(ニ、(シ)、(カ)) ②防災訓練(シ、(カ)) ③保育実習(ニ、(シ)、(カ)、(キ))	①進学講座(ニ、(シ)、(カ)) ②防災訓練(シ、(カ)) ③修学旅行(シ)	①進学講座(ニ、(シ)、(カ)) ②防災訓練(シ、(カ)) ③クラス討議会(ニ、(カ))
11月	①クラス討議会(ニ、(カ)) ②小論文指導(カ) ③学年集会(シ、(キ)) ④進路講演会(カ、(キ)) ⑤冬季休業中の指導(ニ、(シ)) ⑥クラス独自(ニ)	①クラス討議会(ニ、(カ)) ②小論文指導(カ) ③進路講演会(カ、(キ)) ④小論文テスト(カ) ⑤冬季休業中の指導(ニ、(シ)) ⑥クラス独自(ニ)	①センター出願説明(キ) ②センター100日前集会(キ) ③クラス独自(ニ) ④出願校指導(キ) ⑤センター語注意(シ) ⑥冬季休業中の指導(ニ、(シ)) ⑦出願カード記入(キ)
12月	①クラス討議会(ニ、(カ))	①クラス討議会(ニ、(カ))	①家庭学習指導(シ、(キ))
1月	①修学旅行準備(シ)	①修学旅行準備(シ)	①卒業式予行(ニ)
2月	①修学旅行準備(シ)	①修学旅行準備(シ)	①卒業式(ニ)
3月	①合格体験談(シ、(キ)) ②春季休業中の注意(ニ、(シ))	①合格体験談(シ、(キ)) ②春季休業中の注意(ニ、(シ))	

基礎的・汎用的能力：(ニ)人間関係形成・社会形成能力、(シ)自己理解・自己管理能力、(カ)課題対応能力、(キ)キャリアプランニング能力
 上記の(ニ)、(シ)、(カ)、(キ)の位置づけは、文部科学省の基礎的・汎用的能力及び静岡県教育振興基本計画「有徳の人」づくりアクションプランを参考に作成
 ※太字は全学年対象の活動、赤字は複数学年をまたぐ活動
 3大行事に関する活動
 進路行事
 ○内の数字は授業時間数
 (平成28年度 LHR・蜻蛉タイム計画表より)

また、同図に各活動の授業時間数も示した。これによると平成 28 年度の蜻蛉タイム及び LHR の合計の時間数は 1 年が 78 時間、2 年が 72 時間、3 年が 71 時間であった。そのうち、所属校で注力している 3 つの行事（学校祭、合唱大会、運動会）（以下「3 大行事」）の準備及び事後指導に割り当てられている時間が 1 年生で 36 時間、2 年生で 34 時間、3 年生で 36 時間であった。実に約 1/2 の時間が 3 大行事に当てられていることが分かる。一方、進路指導に関する時間の割り当ては 1 年生が 13 時間、2 年生が 10 時間、3 年生が 12 時間であった。

ここで、文理選択に絞って考えることにする。前述したように学習指導要領（注 3）には「生徒が適切な各教科・科目や類型を選択し…（中略）…現在および将来の生き方を考え行動する態度や能力を育成することができるよう、ガイダンスの機能の充実を図ること」とあり、また、所属校の蜻蛉タイムで育てようとする資質や能力及び態度には「自己のあり方、生き方への理解を深め、自らの意思で将来の自分を描くことができる力を育成する」とある。3 大行事は所属校の特色の 1 つで、基礎的・汎用的能力を育成する教育活動の柱の 1 つであるため、これに関する活動を中心に蜻蛉タイムと LHR が計画されている。このことを考慮しても、所属校での入学から文理選択まで（平成 28 年度では 10 月 19 日）の活動は、自己を振り返り、将来の生き方を考える時間や、職業、大学及び学問について調べたり、考えたりする時間が少なく、目標に対する取組が十分であるとは言い難い。文理選択までの期間で自らの将来の方向性を考える活動の充実が求められる。

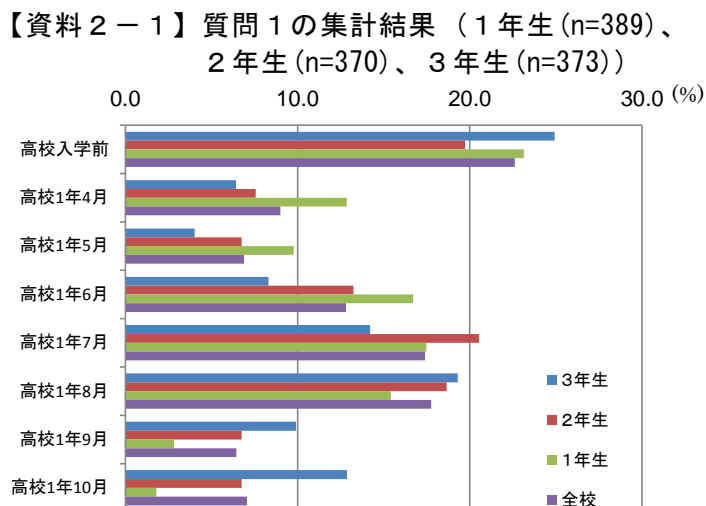
(2) 所属校の生徒への文理選択におけるアンケートによる生徒の現状やニーズの把握

所属校で有効な進路指導計画を提案する上で、生徒の文理選択における実態やニーズを把握することが必要となる。そこで、所属校の全校生徒を対象にアンケートを行った。

ア 質問 1 「文理選択について、いつ頃から真剣に考え始めましたか？」

どの学年も約 25% の生徒が「高校入学前」から文理選択を考えていることが分かる。高校入学後に考え始めた生徒を各学年で比較すると、1 年生で「4 月～6 月」の割合が高く、「9 月以降」の割合が非常に低くなっている（資料 2-1）。今年度の 1 年部では、主体的な文理選択

を促すことに力点を置き、オリエンテーション、学年集会をはじめ、学年便り、保護者説明会などの機会に学校行事や進路行事を、文理選択の一環と位置付け、年度当初から生徒に声掛けを行ってきた。また、従来の取組に



加え、東北大学・筑波大学・新潟大学合同学部学科説明会（以下「3大学合同説明会」）、名古屋大学の教授を招いての文理説明会（名大のとびら）（以下「名大のとびら」）、医学部希望者に対する志望理由等を含む小論文指導（以下「医学部小論文」といった取組を行った。一方、2、3年部は従来どおりの取組であった（各学年主任への聞き取り調査より）。

ここで、質問1の回答項目を、「高校入学前」と、文理選択の説明を行う教科選択説明会が行われる7月より前3か月（「高校1年4月～6月」）、後3か月（「高校1年7月～9月」）に分けた。また、従来どおりの取組を行った「2、3年生」と新たな取組を行った「1年生」を分けて集計し、検定を行った（資料2-2）。なお、「高校1年10月」は教科選択説明会前後

【資料2-2】質問1の χ^2 検定結果

	3年生	2年生	2、3年生合計	有意判定	1年生	有意判定
高校1年4～6月	70	102	172	▽	153	▲
高校1年7～9月	162	170	332	▲	139	▽
回答数(n)	373	370	743		389	

▲有意に多い、▽有意に少ない p<0.05

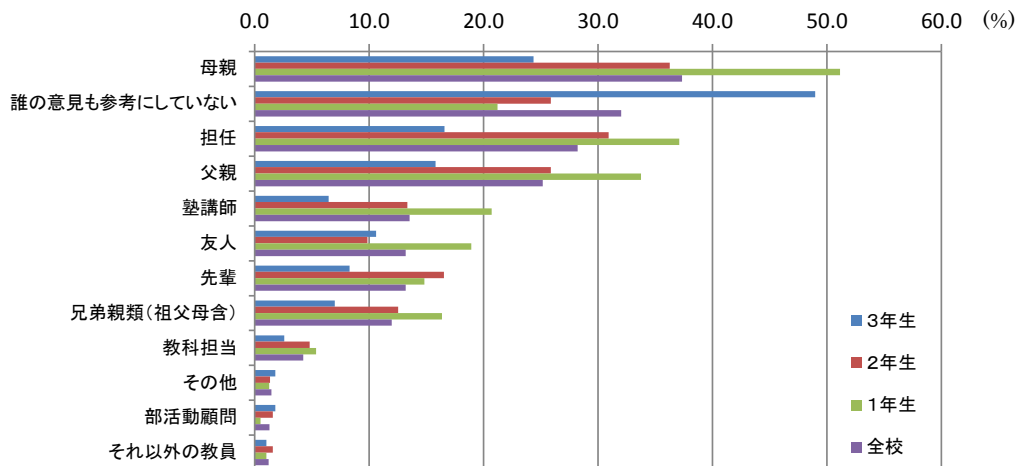
の期間を等しくするため、集計から除外し、「高校入学前」は高校の指導の影響を受けていないため、検定から除外した。その

結果、1年生が文理選択について考え始めた時期は、他学年に比べ、「高校1年4月～6月」は有意に多く、「高校1年7月～9月」は有意に少なかった（ χ^2 検定、 $p < 0.05$ ）。このことから、年度当初から学校行事も含めた教育活動全体をキャリア教育の一環として位置づけ、組織的に取組んでいくことが、早い時期から生徒のキャリア意識の高まりを促すことに効果があると考えられる。

イ 質問2「文理選択は誰の意見を参考にしましたか？（複数回答）」

「母親」の意見を参考にしたと回答した生徒（37.3%）が多く、「担任（28.2%）」、「父親（25.2%）」と続いている（「誰の意見も参考にしていない」は除く）。学年別集計でも、割合に差はあるが、各学年で同様の順になっている。また、生徒との面接において「塾の講師」が頻繁に話題に上がるため、「塾の講師」の影響も強いと感じていたとおり、全体で13.5%、1年生では20.7%が「塾の講師」の意見を参考にしている実態が示された（資料2-3）。

【資料2-3】質問2の集計結果（1年生(n=391)、2年生(n=375)、3年生(n=386)）

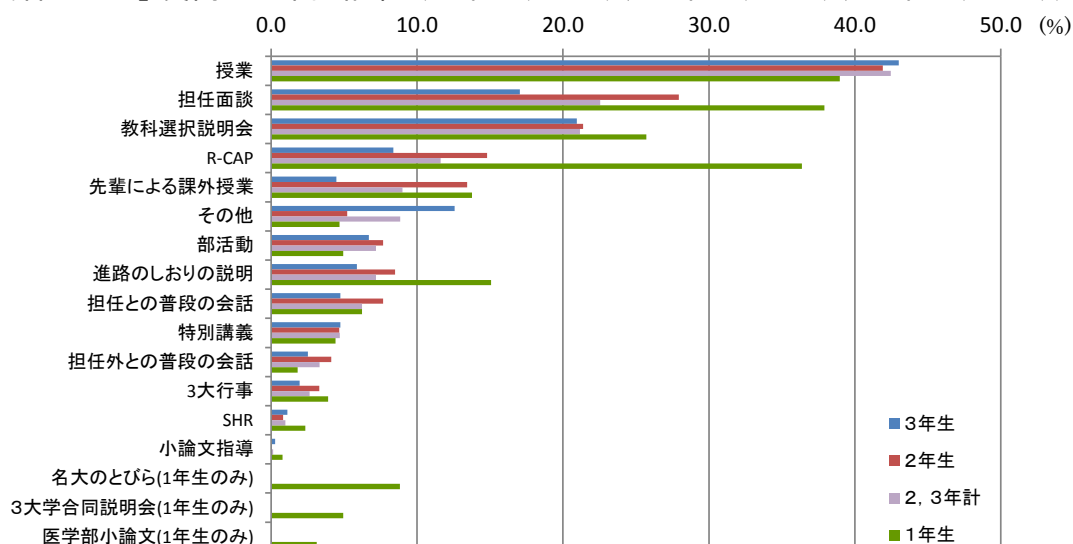


この結果から、進路選択には両親の影響が大きいことが明らかになった。また、担任の影響も大きく、担任の進路指導力向上がポイントとなる。近年、所属校でも、経験の浅い若い教員が学級担任を任される機会が増えていることから、教員には進路指導部を中心に進路研修会などを、保護者には保護者説明会などを利用して所属校における進路指導、キャリア教育の方針、指導の留意点を周知、共有する必要がある。

ウ 質問3「文理選択で参考になった本校での取組は何ですか？（複数回答）」

1年生は他学年では行っていない取組を実施したため、1年生と他学年で集計を別にした。どの学年も「授業」と回答した生徒が一番多かった（2、3年生：42.5%、1年生：39.0%）。次いで2、3年生では「担任面談（22.5%）」、「教科選択説明会（21.2%）」、「R-CAP（適性検査）（11.6%）」と続いている。一方、1年生は「担任面談（37.9%）」、「R-CAP（適性検査）（36.4%）」、「教科選択説明会（25.7%）」の順であった。「担任面談」については、担任との普段の会話（2、3年生、1年生ともに6.2%）を加えると2、3年生で28.7%、1年生で44.1%となり、担任の影響の大きさがうかがえた。特徴的なものは1年生の「R-CAP」で、他学年と比較すると極めて高い割合となっている（2年生：14.8%、3年生：8.4%）（資料2-4）。「R-CAP」

【資料2-4】質問3の集計結果（1年生(n=385)、2年生(n=365)、3年生(n=358)）



については、自己適性を知る手段であることを1年部として生徒と保護者に伝え、活用を呼びかけた（1学年主任への聞き取り調査より）。また、前述の今年度の1年部で行った取組について個別に見ていくと、「3大学合同説明会」の参加者約40名中19名、「名大のとびら」の参加者約90名中34名、及び「医学部小論文」の参加者約50名中12名が「参考になった」と回答しており、学部・学科や文系及び理系の情報提供には、一定の効果があることがうかがえた。

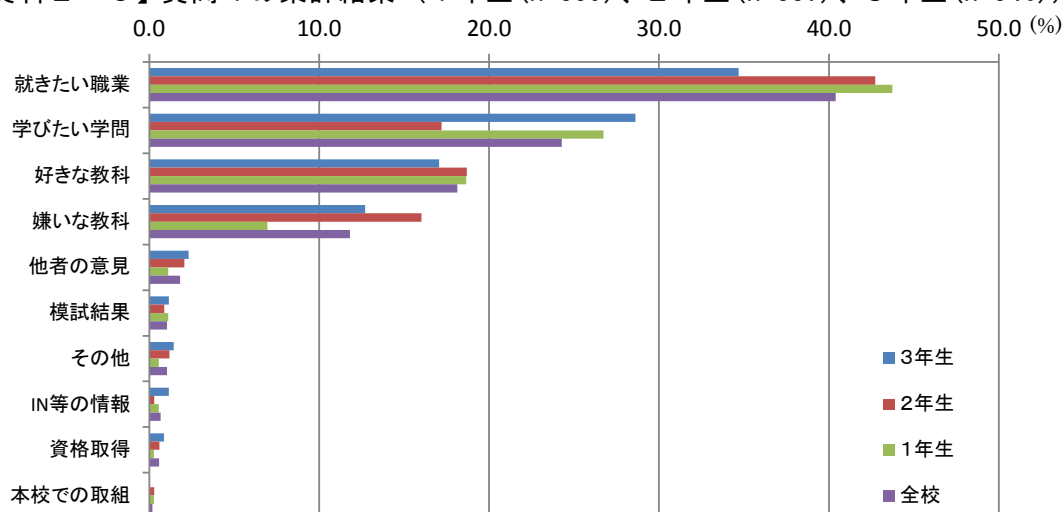
授業を文理選択の参考にした割合が高いことについては、質問4で、文理選択の決め手の54.2%が「学びたい学問」、「好きな(得意な)教科」、「嫌いな(苦手な)教科」であったことを考えれば、理解しやすい。所属校は学問に対する関心が高い生徒が多く、大学卒業後、大学院や研究所などで何らかの研究に従事したいと考えている生徒も少

なくない。授業は、学力向上だけでなく、その分野における興味・関心を高める中心である。したがって、大学入学以降を視野に入れた授業構想が必要である。また、アンケートの自由記述には、選択科目に対する説明不足を指摘する声もあった。各教科担当によるフォローが求められる。

エ 質問4「文理選択の一番の決め手になった事柄は何ですか？」

「就きたい職業」で文理選択を決めたと回答した生徒が40.4%で一番多く、「学びたい学問(24.3%)」、「好きな(得意な)教科(18.1%)」、「嫌いな(苦手な)教科(11.8%)」の順になっている。学年別では2年生のみ、「好きな(得意な)教科(18.7%)」と「学びたい学問(17.2%)」の順位が逆転しているが、上位4項目の回答でほぼ全体を占めている(資料2-5)。

【資料2-5】質問4の集計結果(1年生(n=359)、2年生(n=337)、3年生(n=346))



ここで、前述したように各回答項目を「2、3年生」と「1年生」に分けて集計し、質問4の回答項目で回答数が特に多かった上位4項目について検定を行った(資料2-6)。その結果、1年生は他学年の生徒に比べ、嫌いな(苦手な)教科で選択した生徒数が有意に少なかった(χ^2 検定、 $p < 0.05$)。

【資料2-6】質問4の χ^2 検定結果

このことから積極的な進路への取組が生徒のキャリア意識を高め、嫌いな(苦手な)教科での選択ではなく、将来を見据えた選択を促した可能性が示唆された。

	3年生	2年生	2,3年生合計	有意判定	1年生	有意判定
就きたい職業	120	144	264	ns	157	ns
学びたい学問	99	58	157	ns	96	ns
好きな(得意な)教科	59	63	122	ns	67	ns
嫌いな(苦手な)教科	44	54	98	▲	25	▽
回答数(n)	322	319	641		345	

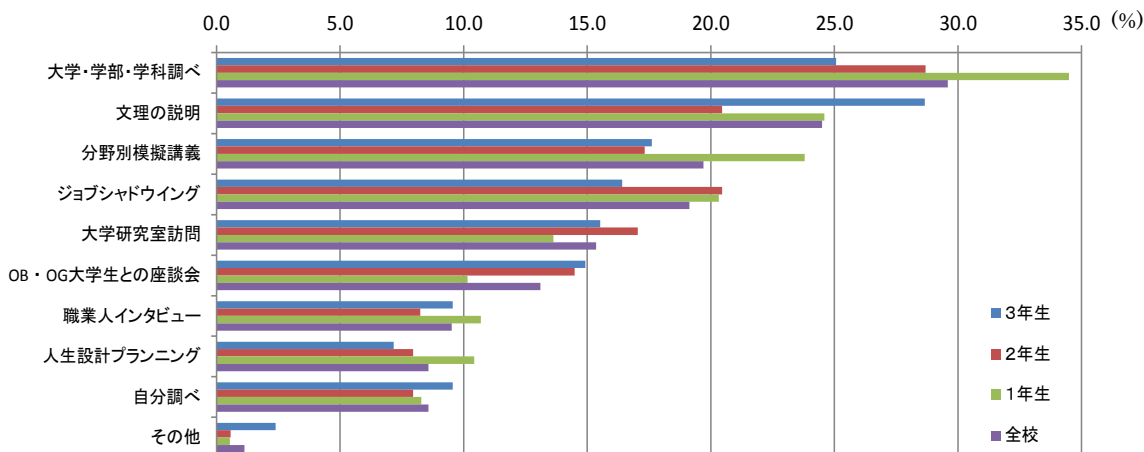
▲有意に多い、▽有意に少ない、ns有意差なし $p < 0.05$

オ 質問5「文理選択で質問3以外にどのような取組が本校があれば、参考になったと考えますか？(複数回答)」

全体では、上位から「大学・学部・学科調べ(29.6%)」、「文系・理系の説明(24.5%)」、「分野別模擬講義(19.7%)」、「ジョブシャドウイング(19.1%)」、「大学研究室訪問

(15.4%)」、「OB・OG 大学生との座談会 (13.1%)」となった。学年により細かな順位は異なるが、上位 5 位までに挙げられた項目は同じであった (資料 2-7)。

【資料 2-7】質問 5 の集計結果 (1 年生 (n=374)、2 年生 (n=352)、3 年生 (n=335))

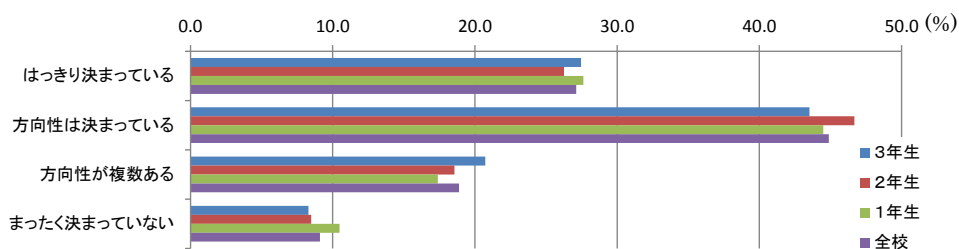


ジョブシャドウイング以外のこれら上位の項目は、大学の学部・学科に関するものである。所属校では、「夢ナビ (フォームページ)」や「逆引き大学辞典 (廣告社)」、「文理科目選択応援 BOOK (リクルート進学総研)」などを生徒に配布し、目を通すように声掛けはするが、見る・見ないは生徒本人に任されている。したがって、学部・学科に関する情報を与えていないわけではないが、情報を受け取ったかどうかは確認していない。また、今年度の 1 年部の新たな取組も希望者のみの参加にとどまっている。アンケートの結果から、すべての生徒対象に将来を見据えたビジョンを考える取組の設置が必要である。

カ 質問 6 「現在、就きたい仕事が決まっていますか？」

「はっきりは決まっていないが方向性は決めている」と回答した生徒が 44.9% で一番多く、「はっきり決まっている (27.1%)」、「方向性が複数ある (18.9%)」、「まったく決まっていない (9.1%)」の順となった。すべての学年で順位は同じ、割合もほとんど差がなかった (資料 2-8)。

【資料 2-8】質問 6 の集計結果 (1 年生 (n=391)、2 年生 (n=377)、3 年生 (n=386))

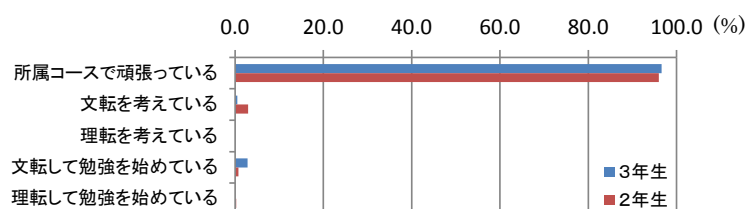


キ 質問 7 「文理選択後について、現在の状況を教えてください。」

この質問では、選択肢が 2、3 年生と 1 年生で大きく異なっているため、分けて記載する。2、3 年生においては、選択コースとは異なる文理型受験を考えている、もしくは、その受験勉強を始めていると回答した生徒はそれぞれ 4.0%、3.3% であり、ほとんどの生徒は文理選択で選択したコースでの受験を考えている (資料 2-9)。

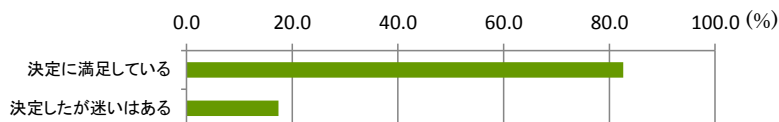
一方、1年生においては、「決定に満足している」、「決定したが迷いはある」の2択で、それぞれ80.2%、19.8%となった(資料2-10)。

【資料2-9】質問7の2、3年生の集計結果
(2年生(n=375)、3年生(n=386))



選択コースとは異なる文理型受験を考えている、もしくはその受験勉強を始めていると回答した生徒は、予想より少なかったが、1年生の結果から約2割の生徒が選択後も迷っている。

【資料2-10】質問7の1年生の集計結果 (n=391)



文理選択はその後の大学受験、大学の学部・学科選択、職業の方向性までも決定づけてしまう可能性もあるため、文理選択において生徒が悩み、迷い、苦しむことはむしろ当然のことと言える。実際、社会においては理系もしくは文系に属する学問を学んだから必ず、その道に進まなくてはならないわけではない。さらにある分野の研究において、深く掘り下げる際に、一つの学問分野だけで解決する研究は少なく、幅広い視点やアプローチが必要になる。このようなことを文理選択前に生徒に気づかせることは必要なことである。

ク 質問8「文理選択での悩みや文理選択の是非など文理選択に関するあなたの思いがありましたら記入してください(自由記述)。」

173名の生徒が文理選択に関する思いを寄せてくれた。2、3年生からは、文理選択の時期に関するコメントや教育課程に関するコメントが多く、1年生は、コース選択後の教科の勉強についてや、科目選択についてのコメントが多く見られた。その中の一部を以下に記載する。

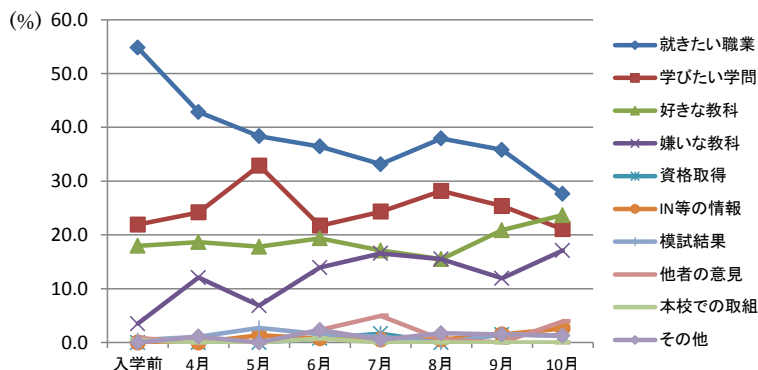
- ・文理両方やりたい人のコースがあってもいいのでは。(3年生文系)
- ・高1の秋の時点で文理選択を迫るのは早急すぎる。熟慮した上で決めたことであっても、1年のうちに進路について明確な意志を持っている人は少ないと思う(抜粋)。(3年生理系)
- ・もっと職業を意識した取り組みが必要。(3年生理系)
- ・将来の夢がわからないので、決めるのにギリギリまで悩んだ。(2年生文系)
- ・数学が苦手だから文系にする人が多いと聞くが、自分のやりたいことを考えて決めた方が良くと思う。(2年生理系)
- ・将来就きたい職業が決まってないので、テストの結果で文理の判断をしてしまった。(1年生)
- ・理系教科(特に数学)があまり得意ではないので、学年が上がるにつれてそのレベルについていけるかが不安。(1年生)
- ・文理選択での生物と物理の選択について。(1年生)

ケ 質問1（文理選択を考え始めた時期）と質問4（文理選択の決め手）、質問6（就きたい職業）及び質問7（文理選択後の状況（1年生のみ））のクロス集計結果

質問1の文理選択を考え始めた時期と質問4、6及び7、それぞれの関連性の有無を調べるためにクロス集計を行った。質問1と4のクロス集計では、文理選択を考え始めた時期が遅くなるほど「就きたい職業」を選択の決め手と回答する生徒の割合は減少し、「嫌いな（苦手な）教科」の割合が増加する傾向が見てとれる（資料2-11）。

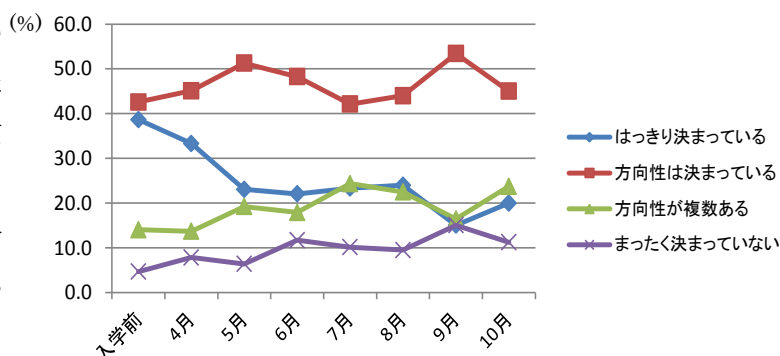
質問1と6からは、【資料2-11】質問1と4のクロス集計の結果（n=1,019）

文理選択を考え始めた時期が遅くなるほど、就きたい仕事について「方向性が複数ある」、「まったく決まっていない」と回答する生徒の割合が増加傾向にある（資料2-12）。



質問1と7からは、【資料2-12】質問1と6のクロス集計の結果（n=1,131）

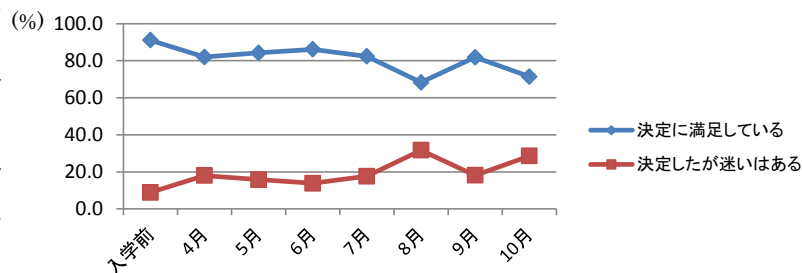
文理選択を考え始めた時期が遅くなるほど文理選択後、「決定したが迷いはある」と回答する生徒の割合が増加する傾向がある（資料2-13）。



これらについて、上述したように「高校1年4月～6月」、「高校1年7月～9月」

に分けて集計し、検定 【資料2-13】質問1と7のクロス集計の結果（n=389）

を行った（質問4の回答項目については、上位4項目のみを対象）が、これらクロス集計に有意差は見られなかった。

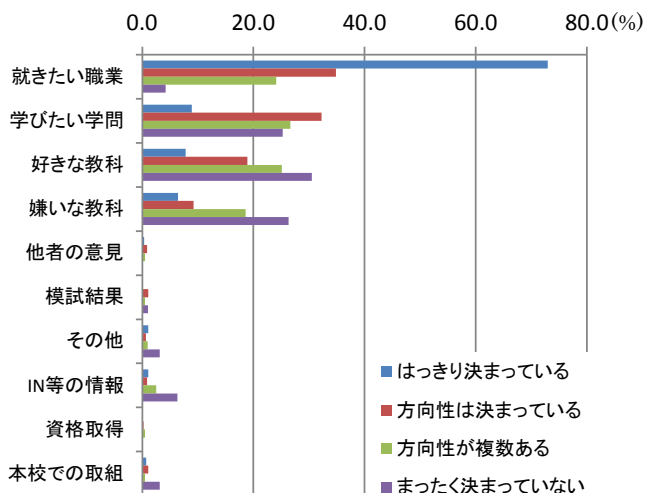


コ 質問4（文理選択の決め手）と質問6（就きたい職業）、質問7（文理選択後の状況（1年生のみ））のクロス集計結果

問4と6のクロス集計では、「はっきり決まっている」、「はっきり決まっていなが方向性は決めている」、「方向性が複数ある」、「まったく決まっていない」の順で、「就きたい職業」の割合が減少し、「好きな（得意な）教科」と「嫌いな（苦手な）教科」の割合が増加している（資料2-14）。

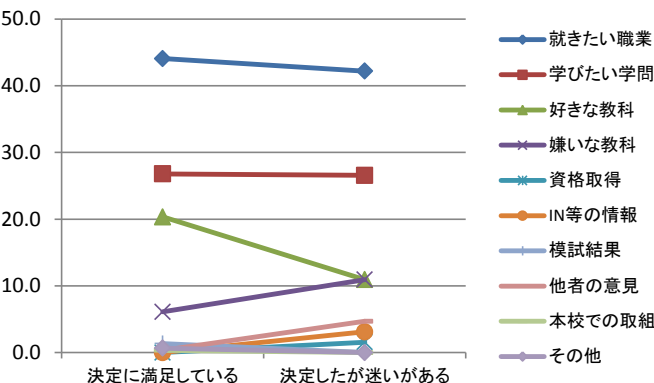
質問4と7のクロス集計では、質問7で「決定に満足している」と回答した生徒と「決定したが迷いはある」と回答した生徒とも「就きたい職業」と「学びたい学問」の割合はほとんど同じであった。しかし、「決定したが迷いはある」と回答した生徒は「好きな(得意な)教科」の割合が「決定に満足している」と回答した生徒より低く、「嫌いな(苦手な)教科」や「インターネット(IN)の

【資料2-14】質問4と6のクロス集計の結果 (n=1,040)



情報」、「他者の意見」の割合が高くなっている(資料2-15)。これらのクロス集計についても検定を行った。なお、検定に際して、質問4については回答項目上位4項目を対象にし、質問6については、将来の方向性がある「はっきり決まっている」、「方向性は

【資料2-15】質問4と7のクロス集計の結果 (n=359)



決まっている」及び「方向性が複数ある」の3項目をまとめ、「まったく決まっていない」は単独で集計した。その結果、質問4と6のクロス集計に有意差が認められた(χ^2 検定、 $p < 0.05$) (資料2-16)が、質問4と7については、非有意であった。

【資料2-16】質問4と6のクロス集計の χ^2 検定結果

	(a)はっきり決まっている	(b)方向性が決まっている	(c)方向性が複数ある	(a)(b)(c)合計	検定結果	まったく決まっていない	検定結果
就きたい職業	205	162	48	415	▲	4	▽
学びたい学問	25	150	53	228	ns	24	ns
好きな(得意な)教科	22	88	50	160	▽	29	▲
嫌いな(苦手な)教科	18	43	37	98	▽	25	▲
回答数 (n)	270	443	188	901		82	

▲有意に多い、▽有意に少ない、ns有意差なし $p < 0.05$

このことから、将来の方向性が決まっていない生徒は教科の好き嫌いや得意不得意で文理選択をしていると言える。

サ クロス集計の総合考察

質問4と6のクロス集計から、将来の見通しが持っていない生徒ほど、教科の好き嫌いや得意不得意で文理選択を決定していることが分かった。好き嫌いや得意不得意は大切な要素ではあるが、それだけで将来に関わる選択を決定することは視野が狭く、

危うい選択になりかねない。これから生徒たちは、変化の激しい社会の中で、よりよい自己実現ができるように自己決定を繰り返していかなければならない。この自己実現の決定に際し、児美川孝一郎氏は「キャリア教育のウソ」の中で、「やりたいこと」、「やれること」、「やるべきこと」という視点のバランスを考え、その三者が交わる場所で進路決定をすれば、実現可能性は高まると述べている。高校での進路選択の一つである文理選択においても、このような視点を持つことは重要だと考えられる。したがって、職業を意識した取組を行い、将来の方向性を考える機会を設けることで、生徒が将来に目を向けることができ、好き嫌いや得意不得意で文理選択することを減らすことができると考える。

質問1と4、6及び7のクロス集計からは「文理選択を考え始めた時期」と「文理選択の決め手」や「将来の職業の決定の有無」、「文理選択後の状況」との間の関係性は薄いことが分かる。しかし、質問1と4の集計結果から示唆されたように、教育活動をキャリア教育の一環と位置付け、組織的に取組むことは生徒のキャリア意識向上や将来を見据えた文理選択に効果があり、また、生徒が自分の将来に向き合い、将来を多面的に考え、判断するための時間を十分に確保するためには、入学後、早い時期からキャリア意識を向上させる取組を行うことが必要であると考えられる。

(3) 県外の進学校での文理選択までの進路指導実践調査

先に述べたように進学校におけるキャリア教育は立ち遅れている傾向にあるが、徐々に浸透してきており、積極的に高大連携を進めたり、インターンシップやジョブシャドウイングを取り入れたりするなど優れた実践を行っている高校も県内外に多く存在する。その中で、少し手を加えることで、所属校で行われている教育活動に無理なく組み込むことが可能だと考えられるものを以下に紹介する。

ア 学習意欲向上：和歌山県立桐蔭高等学校（注5）

全日制の普通科と数理科の併設校であり、創立130年を超える伝統校である。毎年40名前後の者が国立難関10大学に入学している。平成19年度から中高一貫校となり、平成25年度から文部科学省の「研究開発学校」の指定を受けて「進学校におけるキャリア教育」をテーマに研究開発を行っている。総合的な学習の時間の代替として「キャリア桐の葉」という教科を設定し、その中で、入学直後になぜ学ぶのかを問題提起している。内容としては、教科や特別活動、部活動、それぞれなぜ学ぶのか、人生にどのように役立てていくか、学部・学科や職業との関連などを高校独自でまとめた「桐蔭の学び」を教材として、オリエンテーションを行う。その後、数人グループに分かれ、教員に対して上記の内容に関するインタビューを行い、学ぶ理由を各自がまとめ、報告書を作成する。この授業を通じて一人ひとりが学ぶ理由に向き合うことで、同校の教育活動の本質的な意義に気づき、主体的・自律的に学ぶ姿勢を育むねらいがある。この活動を通して、教科・科目がもつ奥深さなどに気づく生徒がいるようである。

イ 大学の学部・学科研究：埼玉県立浦和高等学校（注6）

全日制の普通科高校で、創立120年を超える伝統を持ち、毎年100名を超える者が

国立難関 10 大学に入学する県内有数の進学校である。平成 15 年度から「浦和高校新世紀構想」を策定し、単位制カリキュラム（平成 12 年度から）、新しい学習・進路指導体制、多様な学習機会の提供を柱に教育活動を行っている。平成 12 年度から埼玉大学における聴講を学校外の学修として単位認定しており、高大連携の先進校としての一面も持つ【資料 3】学問の 6 分野

つ。同校は 1 年生の総合的な学習の時間や LHR の時間を用いて学部・学科調べを行っ

A	人文科学系	文学部系統
B	社会科学系	法学部系統、経済・商・経営学部系統、社会学部系統
C	総合系	教育学部系統、生活科学・健康科学部系統、芸術学部系統
D	自然科学系Ⅰ	工学部系統
E	自然科学系Ⅱ	理学部系統
F	自然科学系Ⅲ	農学部系統、医・歯・薬学部系統

ている。クラスを 6 グループに分け、6 つの学問分野（資料 3）の中から 1 つの分野を割り当てる。割り当てられた分野をグループで手分けして調べ、学部・学科研修会ワークシートを作成し、これを分かりやすくクラスで発表している。完成したワークシートはファイルして各教室で閲覧できるようになっている。希望と異なる分野が割り当てられることがあるが、これは視野を広げることに役立ち、また、一度、調べる体験することで、自分の興味のある分野を主体的に調べるようになることがねらいとなっている。この活動の後、興味のある人物について調べる「モデル研究」も行っており、これら取組を行った年は、例年より文理コースの変更が少なくなったなどの一定の効果が認められている。

5 所属校における文理選択までの進路指導の充実に向けて

前述のように所属校では、総合的な学習の時間及び LHR において、3 大行事に関する取組に多くの時間が割かれるために、残された時間は少ない。現在、行われている活動はそれぞれにねらいがあり、どれかを削ることは困難である。しかし、文理選択までの進路指導の充実を図るためには、以上で論じてきたように、所属校に求められている学力向上や高い志の維持、進路選択能力の育成を目標として、アンケートからの示唆や、それから考察したように、入学から早い時期でのキャリア意識の向上や学部・学科などの適切な情報提供が求められる。そこで、それらを包括した入学から文理選択までの進路指導計画を作成した（資料 4）。作成に当たり、所属校における入学から文理選択までの活動を系統的かつ組織的に進めることを目的に 2 つの点に留意した。1 つ目は、8 月に静岡県総合教育センターで行われた高等学校キャリア教育プランニング研修で学んだ「つながり」を意識したことである。従来の取組と新たに提案する取組を自己の再発見と職業や学問の観点からつながりを持たせ、生徒が年度当初から自分の興味・関心や適性をもとに将来の方向性について、ひと続きで考えることができるようにした。2 つ目はすべての教員が同じ方向性を持って進路指導ができるように、それぞれの取組に対して主な内容と学級担任の留意点

を付したことである。以下の(1)～(3)は資料4で組み入れた新たな取組とねらいを示した。

【資料4】文理選択までの進路指導計画(案)

月	進路関係	内容	学級担任 留意点
4月	初期指導	北高生としてのあり方、学習指導	<ul style="list-style-type: none"> ・10月中旬に文理・科目選択があること、そこまでの流れ、文理選択が将来に影響を与える可能性がある選択であることを伝える。 『選択の際の注意点』 ・教科の好き嫌いだけで選択させない。 ・最終的には自分で決めさせる。 ・進路情報は進路便りや学年便り、情報雑誌などで提供する。 ・進路について自分で主体的に調べさせる。 ・教育活動全体が文理選択のヒントとなるような声掛けをする。 『面接』 ・すでに就きたい職業が決まっている生徒には本当にそれでいいか考えを深めるように促す。
	オリエンテーション	進路についての考え方、文理選択に向けて	
	『面接週間』	高校生活での様子、文理選択シート①～③活用	
5月	新X-LHR	学ぶことの意味について考える	<ul style="list-style-type: none"> 『X-LHR』 将来の見通しが見通しにくいこれからの社会において、常に持っている知識や技能を更新、スキルアップして生きていかなければならない。そのために生涯にわたり学ぶことやその態度が必要になることを伝える。
	R-CAP	客観的な自分の特性を理解し、文理選択の参考にする	
	特別講義	社会で活躍する著名人の話を聞き、最新の学問や職業を知る	
6月	進路のしおり	実力テストと大学合格との相関紹介、生徒に高い目標を持たせる、計画的学習の必要性職業・学問研究の説明	<ul style="list-style-type: none"> ・先輩方の大学合格実績から高い目標をもつことの大切さを伝える。 ・もう一度、『選択の際の注意点』を確認し、職業・学問研究の説明をする。 『面接』 自分の興味とR-CAPの結果をつき合わせながら、文理選択を広い視野で考えるように促す。 『職業・学問研究①、②』 『夢ナビ』や「文理科目選択応援BOOK」から興味のある学問を探し、どのような学問か探究させる。
	(3大学合同説明会)		
	『面接週間』	文理選択シート④～⑥活用	
	執行委員長選挙 職業・学問研究①	執行委員長選挙の後半で、自分の興味から、それとつながる学問分野を探す	
7月	(医学部小論文)		<ul style="list-style-type: none"> ・文理選択シートを参考に広い視点で文理選択を考えるように促す。 ・三者面談前後で保護者と文理選択についてよく話をするように促す。 ・できる限り、オープンキャンパスに参加するように促す。
	(名大の扉)		
	職業・学問研究②	自分の興味と学問分野を結びつけ、学問調べを行う	
8月	『三者面談』	文理選択シート⑦～⑩活用	<ul style="list-style-type: none"> 『三者面談』 ・文理選択への進捗状況確認。 ・文系を選ぶことによるメリット、デメリットもしくは理系を選ぶことによるメリット、デメリットを考えさせる。 ・進路における保護者の考えを伺う。 ・教科選択・保護者説明会を受けての質問を受け付ける。
	オープンキャンパス		
9月	文理選択仮登録		<ul style="list-style-type: none"> 『職業・学問研究③、④』 ・学問分野をまとめ、整理することで、分野ごとのつながりや職業とのつながりに気づかせる。先輩による課外授業で社会人の体験談を聞くことで職業と学問のつながりの参考にさせる。 ・異なる学問分野を探究した他者と意見交換することで、視野を広げさせる。 『面接』 ・文理選択本登録後は変更できないことを伝える。 ・『選択の際の注意点』を確認させる。 ・文理選択シートを参考に選択に至る経緯を確認させる。 ・文理選択及び科目選択で迷う生徒、特に科目選択が少なくない。受験という観点も必要だが、興味や将来の方向性にどちらの科目を学ぶべきかも考えさせたい。
	職業・学問研究③	学問分野と職業をつなげる	
	先輩による課外授業	社会人の体験談を聞くことで、学問と職業のつながりを知る	
	『面接週間』	文理選択シート⑪～⑭活用	
10月	職業・学問研究④	グループ内で、発表する	<ul style="list-style-type: none"> ・教科・科目選択で悩んでいる生徒には、積極的に教科担当の話を聞く機会を促す。 ・もう一度、『選択の際の注意』を確認し、登録後はコース変更はできないことを伝える。 ・科目選択、文理選択で迷っている生徒に適宜対応する。 ・自分の決定に対して責任を持つよう促す。
	文理選択本登録		
11月	文理選択振り返り作文	文理選択での思考の経緯を振り返りを行い、今後の目標や力を入れたい教科・科目などを1000～1200字でまとめる	<ul style="list-style-type: none"> ・決定の方向性に苦手な科目があれば、それを克服できるように勉強の計画を立てるように促す。 ・ある分野を究めるためには様々な視点からのアプローチがあり、将来については、必ずしも希望・理想どおりに進むわけではなく、柔軟に考えていくことも必要になることを伝える。 ・文理選択は終了したが、上級学年で、具体的に進路選択をするため、将来の方向性に向け努力を惜しまないように指導する
12月			
1月			
2月			
3月			

* 「職業・学問研究②と③」および「文理選択振り返り作文」は従来の小論文指導の時間を変更して行う。

* 「職業・学問研究④」および「文理選択振り返り作文」は従来のクラス独自に任されたLHRと小論文指導の時間を変更して行う。

(1) 「新 X-LHR」

所属校では入学直後の初期指導で、高校生としての新たな生活を紹介するとともに、中学校とは比較にならないほど進度の速い授業に対応するために、学習の仕方を伝える。また、オリエンテーションでは、所属校の進路指導の方針や進路実現のための助言が行われる。しかし、その後の授業やテストなどで、現実を受け止められず、学習意欲が低下していく生徒も見受けられる。そこで、和歌山県立桐蔭高校の実践例を参考に X-LHR（クラスごとでクラス紹介のスタンプを考え、披露したり、長縄とびをクラス対抗で行うなど、クラスの団結を図る取組を1日を通して行う）の時間の一部を用いて、「なぜ学ぶのか、何のために学ぶのか」を生徒に考えさせ、グループで意見交換し、学ぶことの意味を考える機会を設けることを提案する。学ぶことは単に難関大学に合格するためだけでなく、これから予想される変化の激しい社会において、持っている知識や技能を常に更新、スキルアップして生きていかなければならない。そのために生涯に渡り学ぶことやその態度が必要になる。このような主体的に学ぶ姿勢を育むことをねらいとする。

(2) 職業・学問研究

7月と9月に行われている小論文指導の時間と9月のクラス独自に内容を設定できるLHRの時間を変更して、職業・学問研究を行う。6月及び7月の第一回、二回では、自分が興味・関心を持つ事柄がどのような学問と結びついているかを調べる。これには、所属校で生徒に配布している「夢ナビ」や「文理科目選択応援BOOK」などを用いることを考えている。この中で、興味・関心を持った複数の学問分野について目を通し、特に興味・関心を持った学問分野についてどのような学問かを探究する。9月の第三回では、興味を持った学問分野と職業を上記の資料やインターネットの情報などから結びつける。第四回では異なる学問分野を調べた生徒同士でグループをつくり、発表し合う。このことで、他分野と自分が調べた分野とのつながりを発見でき、視野が広がることが期待できる。これら一連の活動を通じて、様々な学問分野を知り視野を広げ、自己の興味の方向性を知ることができる。また、自分で主体的に進路に関する事柄について調べる姿勢を育成することができる。

(3) 「文理選択シート」及び文理選択の振り返り活動

前述したように、進路決定に際し、「やりたいこと」、「やれること」、「やるべきこと」の視点から考えることが重要である。「やりたいこと」と「やれること」を生徒の志望と適性、得意なことに置き換えると、これらを見出す機会は、進路に関する行事の中だけでなく、授業はもちろん学校行事や部活動にもある。アンケートの「文理選択で参考になった本校の取り組み（質問3）」の回答の中に「3大行事」や「部活動」と回答した生徒がいることから分かる。また、先にも述べたように文理選択は主体的な選択を行う重要な機会である。したがって、主体的に決定できる働きかけをする必要がある。そこで、生徒が、様々な教育活動から興味・関心や適性を見出し、段階を追って主体的に文理選択が行えるように「文理選択シート」を作成した（資料5）。

このシートは、学級担任が面接機会でこれを参考にしながら生徒の考えを把握し、主

体的な選択を促していけるように工夫した。なお、「やるべきこと」については、保護者の視点に置き換えて文理選択シートに反映させた。

【資料5】文理選択シート

4月 面接	① 就きたい職業は何ですか。あればその職業と理由を書いてください。なければ、なぜないのか理由を書いてください。	三者 面談	⑦ 「職業・学問調べ」からどのような職業・学問に興味・関心を持ちましたか。
	② 中学校では、どこで職業体験を行い、その体験を通して学んだことは何ですか。		⑧ 「学校行事」で発揮できた能力は何ですか。
	③ 自分の長所や得意なこと、特性は何ですか。		⑨ 部活動から気づいた自分の長所や特性はどんなものですか。
	* 担任面接で話したことは何ですか。要点を整理して書いてください。		⑩ 1学期の授業を受けて、得意教科と不得意教科はありますか。
6月 面接	④ 今まで受けた「授業」からどんな職業や学問に興味・関心を持ちましたか。	9月 面接	⑪ オープンキャンパスに行って、どんな学問分野に興味を持ちましたか。
	⑤ R-CAPで示された職業適性ランキングから興味を持った職業とその理由を書き出してください。		⑫ 「特別講義や先輩による課外授業」を受けて、何を感じましたか。
	⑥ R-CAPで示された職業適性ランキングから興味を持った学問とその理由を書き出してください。		⑬ 将来の方向性を見据えて、どのような教科・科目選択にしますか。
	* 担任面接で話したことは何ですか。要点を整理して書いてください。		⑭ 保護者と進路について話し合ったことは何ですか。
* 担任面接で話したことは何ですか。要点を整理して書いてください。		* 担任面接で話したことは何ですか。要点を整理して書いてください。	
①～⑭から、あなたは自分の将来についてどのように考え、文系・理系、どちらのコースを選択しますか。また、迷っていること、質問等があったら記入してください。			

さらに、文理選択までの進路指導計画案の中には、従来11月に行われている小論文指導に代えて、文理選択振り返り作文の作成を行う機会も設置した。これは、文理選択の経緯を整理し、決定したコースで自己実現を図る決意を示すものである。また、アンケートからも分かるように、文理選択後も迷いをぬぐえない生徒や上級学年で文理系の進路を転換する生徒もいる。振り返り作文を作成することで、このような生徒を把握できる可能性があり、それらの生徒をフォローする契機にもなる。

6 おわりに

論文を結ぶにあたり、見えてきたいいくつかの課題に触れておきたい。一つ目は、提案した計画や取組が案の段階だということである。本研究では所属校の課題と生徒アンケートから文理選択までの進路指導計画を作成することができた。しかし、これは計画案であり、これから、これをもとに実践し、評価、改善していく必要がある。

二つ目は授業についてである。アンケートから明らかになったように、文理選択で最も参考になった教育活動は授業である。授業は基礎的・汎用的能力を育む場であり、進路選択にあたっては、生徒が自分自身の興味・関心を発見する場でもある。したがって、授業は大学入学後、さらには卒業後の将来像という視点に立ち、生徒の興味・関心を喚起する

ように組み立てていかなければならない。このことを全教員が認識し、全教員の焦点を大学受験ではなくその先に変えるように促していくことが、キャリア教育の充実を図る基盤となる。本研究ではこの内容まで踏み込むことができなかったが、進路指導部や教務部などを中心に学校をあげて、この視点を盛り込んだ授業改善に取り組む必要性がある。

三つ目はアンケートについてである。今回のアンケートは3年生については文理選択の2年後、2年生は1年後、1年生は直後に行った。そのため、1年生のアンケート結果は文理選択における率直な実態を示したものである可能性が高いが、2、3年生のそれは文理選択後の実際にコースで勉強に励んだ結果や大学受験を向かう思いを反映している可能性がある。正確に学年間で比較するには、毎年、文理選択直後に同じアンケートを行う必要がある。

実務研修員として、静岡県総合教育センターで勤務し、学校現場を一步離れて、特に進路指導を中心に俯瞰できたことは、貴重な体験となった。本研究で得た知見を今後、生かしていきたい。また、これからの教育が目指す方向性を目の当たりにできたことで、自分自身の中に新たな教育観として加えることができた。静岡県の全教員のうち、私と同年代の教員が少ないことは聞いている。これからは、若い年代の教員の成長を促しながら自分自身も成長し、学校現場を支えていく立場になっていくことが求められる。この自覚とこの研修で培った経験をもって、学校現場で、教育活動に貢献していきたい。

最後に、この研究に際し、総合教育センターの指導主事の先生方には多くの助言、ご指導をいただいた。また、所属校の校長、副校長をはじめ、数多くの先生方にも多忙の中、ご協力いただいた。この場を借りて御礼申し上げたい。

注

1) 中央教育審議会

『今後の初等中等教育と高等教育の接続の改善について（答申）』、1999年

2) 文部科学省『学校基本調査』、2015年

3) 文部科学省『学習指導要領解説総則編』、2010年

4) 静岡県教育委員会

『静岡県教育振興基本計画「有徳の人」づくりアクションプラン』、2011年

5) リクルート進学総研『Career Guidance Vol. 409』、2015年

6) リクルート進学総研『Career Guidance Vol. 413』、2016年

参考文献

- ・鈴木達哉『地方発！進学校のキャリア教育』、学事出版、2011年
- ・溝上慎一=責任編集 京都大学高等教育研究開発推進センター／河合塾=編
『どんな高校生が大学、社会で成長するか』「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ、学事出版、2015年
- ・文部科学省『高等学校キャリア教育の手引き』、2011年